

2014年8月24日 主日礼拝
説教 「和解のことば、和解の務め」
Ⅱコリント5章11-21節

【パウロの迫力】

ここにあるのは、「和解」。和解とは何か。今まで対立していた二人の人がいる。口も聞かない。絶交している。このふたりが、仲直りをする。会話を始める。協力して共に生き始める、これが和解。神さまと私たちの間の和解。これは聖書の大きなテーマ。とても大事なテーマ。パウロは心を込めて、この和解を情熱と迫力をもって語ります。パウロにとって、どうしても伝えなければならないメッセージ。私たちがどうしても聞かなければならないメッセージを聞きましょう。

【神さまの敵】

私はかつて、「神さまがいるとしても、神さまに支配されたくない。だれかに支配されるなんて絶対嫌だ」と思っていた。神さまとともにいたくなかった。「不倶戴天」という言葉がある。ともに天をいだかず。同じ空の下にいたくない。それが私の神さまへの思いでした。「不倶戴天」と言う言葉は、「不倶戴天の敵」というふうに使います。私にとって神さまは敵。神さまがいたら私は息が詰まると思っていた。だから、神さまが目の前に現れたら、自分の息がつかまらないために、神さまをなきものにしようとしたかもしれない。いや、したにちがいない。

とくに、目の前に、神さまが人となってあらわれ、しかも自分を守ろうとしなかった場合。それが、十字架。私も自分の人生に入りこもうとする主イエスを十字架に架けたと言えます。神さまの敵であった私たちなのです。

【神さまの和解】

神さまに敵対する私たちは仲直りなどしたくない。いっしょにいたくない。そんな私たちと、神さまはいったいどうやって仲直りをされたのでしょうか。

「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです」(21)。「神は」とある。和解は神が一方向的に始めた。そのために神は素手で地上に現れた。それが、子なる神キリスト。そして、十字架に架けられた。罪をみな引き受けて。キリストが引き受けていない罪は、もう私たちに残っていない。だから義。私たちは「神の義」。これは不思議なことです。罪を犯したのは私たちなのに、キリストがその罪を引き受けた。「だから、あなたがたは正しい」、と神さまはおっしゃいます。それは、理屈が通らない、と私たちは思う。けれども、神さまは、ゆずらない。「いや、あなたたちは正しい。だから私の腕の中にいいのだ」と言ってゆずらない。どうしてもゆずらない。これが神さまの和解。この神さまの考えを変えさせることはだれにもできないのです。

神さまには、私たちに和解するつもりがあるかどうかは関係ありません。そんなことには、かまわず和解してしまうのです。神さまは勝手に和解します。和解を求めている私たちと和解してしまうのです。一方的に包み込んでしまう。それが神さまの和解。そして、和解にともなうどんな犠牲をも、惜しまないで支払ってくださいましたのです。

【神の懇願】

「こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい」(20)。ほんとうの悲劇は、もう悲劇は終わっているのに、それに気づかないところにあります。だからパウロは和解を受け入れるように懇願する。それは、実は神さまの懇願。神さまが私たちに懇願するなんて！私たちにはそんなことは、とても信じられないように、思います。けれども、聖書に書いてありますからやはり、ほんとうのことです。神さまは私たちの思いをはるかに超えて愛してくださるお方です。

この大きな愛による和解のことばと和解の務めは、私たちにもゆだねられています。私たちは、自分などの言葉などとしりごみします。けれども、和解を受け入れさせるのは神さま。神さまがしてくださるのです。